

子どもたちが日々見せてくれるさまざまな行動について、発達上の理解と援助という観点から解説します。

園内研修 保護者への情報提供にご活用ください。

今回のテーマ

いざこざ

解決の道筋を示しながら、人とかかわる力を育てる

昨日約束してたのに！

5歳・秋

5歳のハルカとユイ。積み木で遊んだふたりは、「明日もまたやろうね」と約束していました。ところが翌日、ハルカはほかのお友だちとリレーの遊びを始

めてしまいます。前日の約束を破られてしまい怒ってしまったユイ。園でもよく見られるこのいざこざ、大人はどのように見守るとよいのでしょうか。



翌日、ほかの友だちがリレーを始めると、ハルカはその仲間に入ってしまう。ユイは怒って、「一緒に遊ぶって約束したのに！」とハルカを強い口調で非難します。



ハルカは「ごめんね。あと1回やったら一緒に遊ぶから」と言いますが、ユイは「もういい！」と去っていきました。ハルカは困り顔です。



しばらく考えていたハルカは、ユイのところに向かい「ごめんね。やっぱり一緒に遊ぶ」とユイに謝りました。ユイも「いいよ」と言い、ふたりで積み木を並べ始めました。



保育者は2人のそばに行って「ちゃんと謝って約束を守ったハルカちゃんもエライし、許してあげたユイちゃんもステキね。ふたりで仲直りできるなんていいな。お姉さんになったんだね」と言うと、2人はクスッと笑いました。

こうした子どもの行動の意味を、どう見ますか？

発達にとつての意味は？

それぞれが自分の思いを出すようになるといざこざも増える

いざこざは、ささいなめめごとのことであり、園では日常茶飯事です。着替えの際に体がぶつかった、おもちゃを黙って持っていったなど、ちょっとしたきっかけで起こりますが、あとを引くことはほとんどありません。

3歳くらいでは、自我もまだ十分に確立できておらず、相手にされたこともよく理解できないため、いざこざまでにはいたりません。しかし4歳くらいになると感情の行き違いからいざこざが起きようになり、5歳くらいからはさらに意見の対立などが原因でいざこざが起こるようになります。同じ遊びをしたり、同じ目標に向かって活動したりするようになると、意見を出し合う場面が多くなり、おのずといざこざが起こりやすくなるわけです。



大人のサポートは？

自分たちで解決策を見いだすために、状況を整理して伝える

4・5歳児の感情の行き違いを原因とするいざこざは、人と関わる力の育成に欠かせない体験と言えます。ささいな原因でいざこざが起こり、ちょっといやな思いをするけれど、解決してほっとする。この両方の感情を体感することが、相手の気持ちを推し量る素地となっていきます。

意見の食い違いからいざこざが起こった場合、自分の思いや考えを伝えることで、調整し、納得し合うこととなります。とはいえ、子どもたちはまだ自分の思いや考えを伝えるだけの表現力や理解力をもっていません。そこで保育者など大人には第三者として冷静にいざこざの原因や解決の道筋を整理してあげることが求められます。「よく話を聞いてみると、AくんもBくんも同じことを言っていたんだね」と「交通整理」して伝えることで、子どもも「こ

うやって解決していけばいいんだ」と理解することができます。

注意したいのは、泣いている子どものなくさめばかりに徹しないこと。「泣けば解決する」と子どもが誤解してしまいますし、泣くことで子どもなりに状況を説明する機会を失い、成長につながらないからです。言葉によるコミュニケーションを成立させながら双方が納得するよう、子どもの考えや気持ちを誘導していきましょう。

